



ナルドの壺

2026.3.17
No. 82

〒106-8507
港区六本木五―一四―四〇
電話(三三八三)〇六九六

東洋英和女学院
中学部高等部
チャペル通信

高等部クリスマス讚美礼拝

二〇二五年十二月十九日

宝の箱を開けて



青山学院大学 大学宗教部長

大宮 謙

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も

皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決している。ちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

(マタイによる福音書 二章一―一二節)

クリスマス物語の登場人物として、占星術の学者たち、別名、東方の博士たちは欠かせません。学者の専門分野はたくさんありますが、ここに登場するのは天文学者です。彼らの研究領域は、星の動きを観察した上で、星の動きと地上の動き、世界の動きの関係を見つめることでした。彼らは、「東の方」、具体的にはヨルダン川の東側、おそらくアラビアかペルシア辺りから来たのですが、そこでは当時の最高水準の学問が発達していました。ですから、彼らは当時の最高水準の天文学者たちでした。

ある時、占星術の学者たちは、星の動きの異変に気付きました。詳細は聖書に記されていませんが、彼らは何かの星の動きを観察した上で、それが「ユダヤ人の王が新しく生まれた」ことを意味すると解釈したのです。そして、自分たちの解釈に基づき、新しい王を拜むために、ヨルダン川を渡り、ユダヤへ来たのです。エルサ

レムに到着した学者たちは、「ユダヤ人の王として新しく生まれた方」の居場所を尋ねました。すると、これを聞いたヘロデ王とエルサレムの人々は不安を抱いたのです。

ヘロデ王は、自分の地位に固執し、新しい王の誕生に嫉妬心と怒りを燃え上がらせたに違いありません。一方、エルサレムの人々は、既にヘロデ王制が三十年ほど続く中で、政治的な変化が起こりそうなことに、漠然と不安を抱いたのです。

ヘロデ王は事態に対応するために、まず祭司長たちや律法学者たちを呼び集め、メシアすなわち救い主が何処に生まれることになっているかと問い質しました。ユダヤでは伝統的に、王の即位の時に、神の助けと守りを願って油を注ぎ、こうして油を注がれた王をメシアと呼びました。ですから、ユダヤでは政治的、軍事的にユダヤを救う王こそが、メシア、救い主なのです。

ちなみに、ローマ帝国の皇帝も、力で相手を支配し、ねじ伏せ、黙らせることで、ローマ帝国の秩序、すなわち「ローマの平和（パックス・ロマーナ）」を維持する救い主だと、自分のことを言い立てていました。しかし、今や全く新しいタイプの王、メシア、救い主が生まれました。それこそが、愛によって人の心を動かし、苦しみ、悲しみを癒す救い主イエス・キリストです。

さて、ヘロデ王の質問に対して、祭司長たちや律法学者たちは、聖書を的確に引用し、「ユダヤのベツレヘムです」と大正解の回答をしました。ところが、彼らはメシアが生まれる場所を知っていて、しかも、どうやら新しい王、メシアが生まれたらしいという情報も聞いていたと思われるのに、確かめに行きませんでした。残念ながらユダヤ側の学者たちはフットワークが悪いのです。

対照的に、占星術の学者たちは、フットワークの良さを発揮

し、ヘロデ王のところを去ると、自分たちがヨルダン川の向こう側で観察した星に導かれるように、幼子イエスのいる場所に辿り着きました。

注目したいのは、学者たちが喜びに溢れるタイミングです。彼らは自分たちが東方で見た同じ星が幼子のいる場所の上に止まった時、その星を見て、まだ幼子を見る前に、ここに救い主がいることを確信して喜びに溢れたのです。私の想像ですが、星を見ている時に、家の中に入る前から、既に家の中から幼子イエスを通して神の愛が溢れ出し、学者たちは神の愛に包まれる経験をしたのではないかと思います。

もう一つ、ぜひ注目したいのは、学者たちがベツレヘムへと旅をした時に、「東方で見た星が、学者たちに先立って進んだ」と聖書に書いてあることです。ある礼拝で、この場面について、『星が先立って進んだ』ということは、学者たちは夜、旅をしたんですよ

ね」と言った人がいました。私は思わず、「なるほど」と思いました。エルサレムからベツレヘムまでは一〇キロ弱の道のりで、それほど遠い訳ではありません。でも、二千年前のユダヤでは、道は舗装されておらず、昼間に移動した方が、はるかに楽だったはずで、動物に襲われる危険も昼間の方が少なかったでしょう。

しかし、星に導かれることが学者たちには大切だったのだと思います。二千年前のユダヤに、夜に光り輝くネオンサインはありません。ですから、昼間の方が、あれこれ目に入るものが多く、結果として気が散って、なかなか目的地に辿り着かないことにもなりかねません。だからこそ、確かな道を示す星が学者たちには大切だったのだと思います。私たちも、ガイドとなるものを絞り込み、どの声を参考にするのか、情報源、ニュースソースを見直すことがあっても良いかもしれません。さて、ベツレヘムの場面に戻り

ます。家の中に占星術の学者たちが入って行くと、幼子イエスは母マリアと共におられました。そこで、学者たちはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開け、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げました。これらは当時の贈り物としては、どれも高級品だったと思われるます。

皆さんの中には、幼稚園や小学校などで、ページェントと呼ばれるクリスマス劇に出演した人もいるでしょう。この劇では、見ている人に分かりやすいように、しばしば学者たちが、黄金、乳香、没薬という贈り物をラッピングもなしの剥き出しの状態を持ち運びます。

でも、聖書を読むと、それぞれの学者が、贈り物を宝の箱に入れ、大切に持って来たことが分かります。しかも、宝箱は複数形です。海賊の宝箱のような大きな宝箱に財宝を一旦とめたのではなく、一つの宝の箱に一つの贈り物を入れ、大切に運んだのだ

と思います。

ちなみに、占星術の学者たちは、別名、三人の博士たちと呼ばれますが、学者の人数も聖書には記されていません。分かることは学者が複数人だったことだけです。贈り物が三つなので、一つずつ三人が運んできたのではないかと考え、三人の博士と呼ばれるようになったでしょう。

ともかくも、学者たちはそれぞれの宝の箱を開け、箱の中から宝物を取り出し、赤ちゃんイエスに献げました。たいへん印象的な場面です。当時の最高峰の天文学者たちが、ベツレヘムという山間の村までわざわざ行き、赤ちゃんにひれ伏し、最高級の贈り物を献げたのです。

一般的に言って、赤ちゃんには不思議な力があるように思えます。例えば、エレベーターの中で、たまたま赤ちゃんと一緒にになると、思わず微笑みかけたりします。また、もしも赤ちゃんに微笑んだ時に泣かれてしまっても、素

直に「ごめんね」と言える気がします。

こうした赤ちゃんに共通する魅力、人を魅きつける力が、生まれただけのイエス・キリストにもあったことでしょう。しかし、それだけでなく、神が近くにおられること、すなわちインマヌエル（「神が我々と共におられる」と）を、感じさせ、心を温められる、さらなる魅力が、イエス・キリストにはあったのではないかと想像します。だからこそ、学者たちは生まれたばかりの赤ちゃんの前で、ひれ伏し、贈り物を献げたのだと思います。

こうして、大切に運んできた宝の箱の中身をイエス・キリストに献げた結果、学者たちの宝箱は、空っぽになったことでしょう。しかし、幼子イエスに出会ったことで、学者たちは自分たちの心の宝箱に、喜びや希望や愛を溢れるほどに受け取ったのだと思います。

では、今日、クリスマス礼拝に集められた私たちは、それぞ

れ、ここに何を持って来たでしょうか。私たちの宝箱、特に心の宝箱には、何が入っているでしょうか。イエス・キリストに献げる宝が詰まっている人もいます。

喜び、感謝、希望ばかりが心の宝箱に溢れている人もいます。でも、愚痴や不満や疲れや不安がパンパンに詰まっています、もう入り切らずに口から出そうになっている人もいます。荷物のパンパンに詰まっても開けるのも一苦労のようなパンパンな心の状態の人もいます。

ぜひ、赤ちゃんイエスを思い浮かべ、心を柔らかくして、神の前で心の箱を開いてみてください。具体的には、神に呼び掛け、神に向かって祈ってみてください。そして、愚痴や不満や疲れや不安を神の前に差し出してください。心の思いを神に注ぎ出すイメージです。心の中にこびり付いている、厄介な思い、ドロドロ、ネチヨネ

チヨして腐り始めている思いを吐き出して、スッキリしてください。そして、どうぞ救い主イエス・キリストを通して神の愛を受け取ってください。

イエス・キリストは、私たちを救うために飼い葉桶に生まれてくださり、十字架で死んでくださいました。このイエス・キリストに、神の愛がはつきりと現れています。救い主イエス・キリストを通して、神の愛を心の宝箱で受け取るクリスマスでありますように。

創立記念特別週間礼拝

石 澤 円

(一九八三年卒)



彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」

イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛

しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」

(マルコによる福音書

一二章二八〜三二節)

相手を思いやる心

ごきげんよう。

ただいまご紹介に預かりました石澤です。…いつも夫が大変お世話になっております。

この度お話をさせて頂くことになりましたのは、はじめに柿野教頭先生から、母校で卒業生として話をしてもらえませんかとお話を頂き、私のような者でもよいのかと戸惑いましたが、柿野先生は、小学部の頃から親しくさせて頂いている同級生でもありますし、なかなかお断りしづらくお引き受けいたしました。けれども、

いざお引き受けしてからあらためて考えますと、今日ここにおいての先生方の中には、以前から大変お世話になり親しくさせて頂いている方々も多くおられますし、私の母教会である三軒茶屋教会に通ってきてくれている中学生高校生の生徒さんたちも何人かいらっしゃるし、何より夫もこの場で聞いていると思うと：なんだか緊張感が増しますが、私のような小さな器でも、神様が用いてくださるのだと、この機会を大切に思い、恵みに感謝しつつ、私の昔々の英和生の頃のお話など、拙い話ではありますがお話しさせて頂きます。

今、皆さんと一緒に歌った讚美歌「あさかぜしずかにふきて」は、私の好きな讚美歌のうちのひとつです。この讚美歌を歌う時、私はいつでも野尻湖のほとりにいる思いがします。大好きな野尻の、朝の清々しい空気の中、静かな湖面を見つめつつ捧げる礼拝は、私に

とって神様を近くに感じられる特別な時間でした。

私は、野尻っ子だったので、野尻には沢山の思い出があります。一人っ子だった私にとって、野尻キャンプで一緒に生活するメンバーは、まるで本当の姉妹のようでも嬉しかったです。皆で一緒に生活していると、時にはお互いの意見が合わずに喧嘩をしてしまったり、誰かが怪我をしたり体調を崩してしまったりと、いつも楽しいことばかりがあるわけではないのですが、そういった出来事ひとつひとつをみんなでなんとか乗り越えていくと、素晴らしい絆が生まれたり、学校では分からなかった友達の意外な一面が見えますますその人を好きになったり：「友情」なんて口に出して言うのは、学校では気恥ずかしいなと思っても、野尻の大自然の中では熱く語ってしまえて不思議でした。

大好きな野尻キャンプと同じ位

情熱を傾けていたのは部活動でした。私は、中一の時から高二までずっとEDCに所属していました。部員一丸となって一つの作品を作り上げて楓祭で発表することに情熱を注いでいました。特に高二の時は、その年の楓祭での発表作を決める時に、二つの作品のうちどちらにするかで意見が真っ二つに分かれてしまい、かなりもめてしまった事を思い出します。それでも、お互いそれぞれの考えを全て出し切って話し合った結果意見がまとまり、一つの作品に決めることが出来ました。そこから、高二全員でその作品を大切に思っ、部員全体で頑張っって作品を作り上げることが出来ました。そしてその作品がその年の楓祭のステージ部門で最優秀賞に選ばれた時の感動は、今も心に残っています。

野尻キャンプでの思い出も、EDCの思い出も、こうして思い起こしてみると、いつもそこにはお

友達の笑顔があり、お互いに励ましあったり支えあったりしたシーンがいくつも思い出されます。お互いを思いやる心は、こういったいくつもの場面の中で培われていたのだなあと思ひ起こされます。

学校での毎朝の礼拝の時間は、お話しするのも恥ずかしいことですが、睡眠時間になってしまっていることも多かったと思います。それでも、何か悲しいことがあった時、辛いなど感じてしまっている時、お友達との関係がうまくいっていない時など、不思議とそこの日読まれる聖句や先生のお話がスッと耳に入っって来て勇氣をもらえたり、元気が出た事を思い出します。今思えば、毎朝の礼拝の間は、多感な時代の私にとって、心を整えることの出来る大切な時間だったのだなあためて感謝しています。

今朝私の選んだ聖書箇所は、東洋英和で標語として掲げている

「敬神奉仕」の箇所であり、英和の生徒であるみなさんにとって、この聖書箇所は礼拝の時間に限らず、いつも自然に耳にしていることと思います。そしてこの標語は、このように講堂にも掲げてありますので、常に目にもしますね。自分の学校の標語を誰もがさっと答えられるのは実は素晴らしいことだと、大人になった今改めて思います。

英和生となり、神様に出会い、どんな時でも、自分のことをしっかりと受容してくださる神様がいてくださることを知り、自分のことを大切に育ててくださる家族や先生方、大事に見守っていてくださる周囲の方々がいてくださることに気付き感謝し、そして、自分もまた、他者を同じように大切に思う事。これは、私の原点となっています。大人になった今も、何か不安や心配事がある時や、悩みがあったりしたら良いか迷ってしまった時に、この原点に立ち

返ると、少しずつでも前に進み続けることが出来ているのではないかと思います。

英和で学び、神様に出会い、何にも代えがたい心の羅針盤を手に入れられた事を心より感謝しています。

今、英和に通っていらっしゃる中学生高校生の皆さんも、どうか一日一日を大切にされ、どんな時でも神様が共にいてくださり、愛していてくださることを忘れずに、安心して、お友達と共に、これから様々なことにチャレンジしていったきたいと思えます。

瀬上友見

(一九九七年卒)



何事にも時があり

天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時

殺す時、癒す時

破壊する時、建てる時

泣く時、笑う時

嘆く時、踊る時

石を放つ時、石を集める時

抱擁の時、抱擁を遠ざける時

求める時、失う時

保つ時、放つ時

裂く時、縫う時

黙する時、語る時

愛する時、憎む時

戦いの時、平和の時。
人が労苦してみたところでは何に

なろう。

わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。

神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。

(コヘレトの言葉

三章一〜二節)

神様のなさることは

時にならって美しい

ごきげんよう。

東洋英和での中高時代を振り返ってみると、楽しいこともつらいことも沢山あった濃厚な六年間でした。音楽部で先輩後輩同級生たちと一つの作品を作る喜びを分かち合えたことが私にとって素敵な思い出です。中学二年生の時には友人とのトラブルなどで一年ほど不登校となった時期もあります。今、つらいなと思っ

人、苦しいなと思っっている人がいたら、少しでも気持ちが悪くなるというなと思っって今日はお話ししたいと思います。

私は小児科医です。中学部のころから医者になりたいなあとなんとなく思っっていました。私の確固たる夢となっただのは高校二年生の時です。医者になるなら早めに準備をした方がいいかなと考えた私は音楽部を高校一年生でやめ、高校二年生を迎えました。塾の夏期講習を申し込むべきかな、私は本当に医者になりたいのかな、他の道も気になるな、と進路にすごく悩んでいた時期です。そんな時、海外ボランティアの記事を新聞でみつけました。当時、高校生から参加できる海外ボランティアはほとんどなく、これだ！と感じたのを覚えています。

NPO法人LIFEが主催するワークキャンプで、インドネシアのスンバ島という島で二週間現地の人と暮らし、植林をしたり、水源地从ら村まで給水管を敷設する

工事をしたりするボランティアでした。お金がなくてペンやノートなどの学用品を買えない子ども達、空腹をまぎらわすため紙タバコを噛み続ける五、六歳の小さな子たち、村には水道がなく何キロも離れた水源地まで毎朝水汲みにいく子ども達、何不自由なく都会で私立の高校に通う私にとっっては衝撃的な出来事ばかりでした。この経験がきっかけとなり、必ず医師になっって発展途上国で働くぞという気持ちが強くなりました。

昭和大学の医学部に進学、卒業後研修医として勤務したのは大阪にある淀川キリスト教病院です。医者になっって二十年目の今年五月に自由が丘でぶどうの木こどもクリニックという小児科を開院しました。クリニックのロゴにはぶどうの木と一匹のひつじが描かれており、見る人が見たらいかにもクリスチャンとわかるようなクリニックです。そんな私ですが、クリスチャンファミリーで育っただけでもなく中高時代の朝の礼拝は

寝ていることが多く、聖書の授業を一生懸命聞いていたような学生ではありませんでした。自分でもクリスチャンになるなんて全く考えたこともなかつた中高時代でしたが、医学部の五年生の時に受洗しました。

憧れの医学部に入っって最初につらかつたことは、とにかく覚えることが多すぎることでした。体中の神経や筋肉や血管の名前を覚える解剖学の試験前日は悪夢のような時間でした。しかし、そんなことよりももっともつと苦しいことがありました。

五年生になっってから病院実習がはじまり、実際に患者さんと接することが増えていきます。骨の悪性腫瘍で長い間入院している高校生の男の子、胃がんで余命数週間と伝えられた三十代の女性が吐き気で苦しんでいて、その傍らには状況がわからずにママ、みてーと自分のお絵描きをみせる小さな女の子。脳梗塞で意識不明の状態の四十代の男性とずっと泣き続けて

いる中学生の娘さん。たくさんの患者さんやご家族と出会いました。どうしてこの人が、どうしてこの家族が、こんなにも苦しまなくてはいけないのか、考えだしたら、どんなに苦しくなっっていました。つらい状況をみる度に病院に行くのがつらくなりました。この時、なぜか、教会にいけないが答えがわかるかもしれないと思っい、高校卒業以来一度も行ったことになかつた礼拝にでてみよう、教会に再び足を運んでみました。

そこから私の信仰生活が始まり、日曜礼拝や讃美歌、祈り、英和生だっただ時に当たり前だっただ暮らしが戻ってくると、目の前の患者さんに徐々に向き合えるようになっていきました。

実際小児科医として働きたすと、目の前にいる患者さんたちや親御さん達に向き合いたい気持ちが強くなり、当初夢見た途上国で働くことはあまり考えなくなっていきました。

そんな中、六年前NPO法人L

I F E から突然連絡があり、インドネシアのスンバ島で新たに村人たちの栄養改善のプロジェクトを始めたいので小児科医として手伝ってもらえないかと話がありました。こうして十七歳の英和生だった私が三十年後に再びスンバ島に行くことになりました。私が高校生の際に植林した数本の苗木が三十年の時を超えて大きな森に変わっている姿をみてすごく感動しました。そして、今度は医師というプロフェッショナルなアドバースができる立場となって戻れたことに感謝しています。去年、石澤先生や武井先生を通して英和でもスンバ島の支援をしていただいたことに心から感謝しています。L I F E では今でも高校生が参加できるキャンプを続けていますし、何かの形で継続的な支援をしていただけたらと思っています。

神様のご計画は私たちが予想できない、私たちの思いとは違う、はるか遠いところにあるかもしれ

ません。クリスチャンになるだなんて当時仲良かった友人も私自身も思ってもいませんでした。高校二年生だった私が三十年後にまたスンバ島に行き小児科医という立場で村の人たちの為に活動できる日がくるなんて思ってもいませんでした。自分のクリニックを開業することも考えていなかったのですが、今は目の前で困っている親御さんや子ども達に向き合えることに心から喜びを感じています。

神様は必ず一人一人の人生の道を示してくださいます。まだ自分に与えられた使命やタラントに気づいていない人もいるかもしれません。でも必ず神様はいつも傍にいてくださっています。私の今までの人生、神様がずっといてくださったと信じています。皆さんの人生もそうです。今日の聖書の箇所は中高時代には全然私の心に響かなかった箇所ですが、今は一番好きな箇所です。口語訳の聖書では、今日の聖書箇所一節は「神のなさることは皆その時に

かなって美しい」と訳されています。私はこの「時になんて美しい」という訳が好きです。

人生には辛い時や嫌なことがあることもあります。それでも、逃げないでその苦しみや悲しみをしっかりと感じ、すべての時を定めておられる神様を信頼し、自分に与えられた人生を一日、一日大切に、奉仕の心を持ちながら感謝して生きていく。そうすることで、幸せで豊かな人生を送ることができると確信しています。素敵な人生を送ってくださいね。

今日このような機会をくださった先生方、そして神様に感謝して私のお話しを終えたいと思います。

村上言衣

(二〇二四年卒)



神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。

(ローマの信徒への手紙

八章一八節)

英和を卒業して私が最初に「会いたい」と思ったのは警備員さんでした。大学生活が始まった日、校門にある守衛所の奥に警備員さんがいるのが見えたのですが、挨拶をすることはありませんでした。英和生のみなさんがご存じのように、英和では毎朝、警備員さんが校門に立って「おはようございます」と挨拶をしてくださいま

す。警備員さんがいたら挨拶をするのが習慣になっていたので、校門と守衛所を通ったのに挨拶をしないことに違和感を覚えました。英和に通っていたときも英和の警備員さんがとても親切だと思っていましたが、大学に入ってその存在の大きさを実感し、英和の日常が私の身に染みついていてのを感じました。これが卒業後、最初に「英和が懐かしい」と思った瞬間です。

そんなことを思い出して、英和で過ごした日々を改めて振り返ってみました。私は牧師の家庭に生まれて、自然とキリスト教の中学校を受験し、英和に進学しました。英和に入学する直前のイースターに受洗をして、これから「キリスト教に親しんでいる人たちと出会うのかな」と思っていました。が、実際に出会ったのは「ごきげんよう」という未知の挨拶と、活発でテンションの高い英和生たちでした。英和の生活で真っ先に思いつくのは友人や先生と過ごした

些細な時間で、私自身が劇的に変わるような大きな出来事があったわけではありません。その一方で、当時の私にとっては、ひとつひとつの出来事の中で、自分なりに大きなものに向き合っていたことを思い出します。

私に気づきを与えてくれた友人たちの一人にLさんがいます。Lさんは中学一年生のときのクラスメートで初めは静かで勤勉そうな印象を受けました。なんとなく親近感を感じた私がごちない話題を持って話しかけたのをきっかけに、いつのまにか仲良くなりしました。中二までは同じクラスでしたが、中三からはずっと違うクラスでした。コロナ禍で学校に来られない時期もあり、高校では授業もほとんど重ならず、会える時間は限られていきました。お互いに向き合うものが変化していく中でLさんが私に多くの言葉と楽しい時間をくれて、今では七年以上の付き合いになります。高校三年生の冬、いつものように廊下でLさん

と話していたとき、通りがかった先生に少し驚いた声で「二人、仲いいの?」と言われたことがありました。高校三年生の私とLさんが一緒にいるのは意外に見えるのかもしれないと思い、他の人から見た私とLさんの関係について考えました。高校生になったLさんは、部活や勉強に全力で取り組み、リーダーシップを発揮していました。一方、私はクラスでは口数が少ないほうで、マイペースに過ごしていました。私たちにとって自然な関係は、周りから見たら、氣質が異なっていて接点がない二人に見えるかもしれないと想像しました。そんなことを思っただけで、今までLさんとの関係について他の人にどう見られるか考えたことがなかったと気が付き、人の目を気にせずに二人で時間を過ごすうちに、いつのまにかその関係に守られていたのを実感しました。

また英和で出会った聖書の言葉もあります。先ほど読んでいた

いたローマの信徒への手紙第八章二八節です。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということをし、わたしたちは知っています。」入学する前から教会で聞いていましたが、英和での日々で自分のこととして改めて出会った聖書の言葉です。

私にとっての警備員さんであったりLさんなどの友人であったり、聖書であったり、自分が無意識のうちに守られていた場所や言葉の存在に、ふとした瞬間に気づくことがあります。私が気づいていなかった小さな関わりが、今の私をつくっていると感じています。そして今も私は私をつくってくれた多くの人に気づいていないのだらうと思います。私は英和での日々を振り返って、今そんなことを思っています。

さて、私も二年前まで皆さんの座るところで卒業生の方のお話を聞いていました。何を聞いたかはぼんやりとしか覚えていま

せん。そのとき、私は卒業して
なかつたので卒業生がしてくださ
る英和の日々をふりかえるお話を
「あー、そうなんだ」と他人事と
して聞いていました。今、ここに
いる中にも当時の私のような人が
いると思います。そんな私も今は
先輩方の気持ちがわかるような気
がします。もちろん私が礼拝でお
話を聞いた卒業生と私の振り返る
英和は違いますが、ただそれぞれ
に振り返る英和があれば、それで
いいのだと思います。どんなもの
であっても、振り返ったときに私
をつくってくれた英和での日々が
あることに今も私は支えられてい
ます。

朝の礼拝



社会科 松木 強

さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたの
で、フリギア・ガラテヤ地方を通って行った。ミシア地方の近くま
で行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さな
かった。それで、ミシア地方を通ってトロアスに下った。その夜、パ
ウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニ
ア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ってパウロに
願った。パウロがこの幻を見たとき、わたしたちはすぐにマケドニア
へ向けて出発することにした。マケドニア人に福音を告げ知らせるた
めに、神がわたしたちを召されているのだと、確信するに至ったから
である。

（使徒言行録 一六章六〜一〇節）

皆さんは「ナラティブ(narrative)」
という言葉をご存知でしょうか。
この「ナラティブ」という言葉、
日本語では「物語」とか「語り」

と訳されます。近頃この単語を
ちよくちよく耳にするのですが、
一般的に用いられる「ストーリー
(story)」とは少し意味が異なり

ます。「ストーリー」が「完結し
たお話し」を指すのに対して、「ナ
ラティブ」は「語り手自身によっ
て意味づけられた物語」という一
歩踏み込んだ意味もっています。

ビジネスの分野では、マーケ
ティングや広報などの領域で、企
業が一方的に発信する情報ではな
く、消費者が共感して「自分事と
して参加できる物語」が重視され
るようになってきたようです。医
療現場でも、患者が語る「病気に
なった経緯や背景」に耳を傾け
て、対話を通じて治療の方向性を
探る「ナラティブ・アプローチ」
が注目されているそうです。ま
た、政治や社会問題においても、
人々がどのような価値観や「ナラ
ティブ」物語」を共有できるのか
が、世論形成の大きな要素となっ
てきています。

では、なぜ今、「ストーリー」
ではなく、「ナラティブ」なので
しょう。その背景には、数字や実
績などの客観的なデータだけで
は、人の納得や共感を得にくく

なってきたという指摘がありま
す。同じ事実でも、立場や価値観
によって解釈が分かれますし、正
論を述べるだけでは、人の心は動
かせない。また、価値観が多様化
して、「これが唯一の正解」と言
える生き方や理想像はすでに失わ
れています。さらに、SNS時代
では、短い言葉で感情に訴え、共
感を獲得する一大競争が展開され
ています。その中では、事実の正
確さ以上に「誰が、どんな物語を
語るのか」が重視される傾向も強
まってきました。

しかし、それを突き詰めていく
と、同時に危うさも垣間見えてき
ます。極論を言えば、もし、社会
的に絶大な影響力をもつ人物が、
「非常に魅力的な物語」や「不安
や恐怖に訴える語り」を巧みに用
いて人心を掌握すれば、大衆を扇
動することもできる。その先では
権力が濫用され、秩序が破壊され
たり、人権が侵害されたりするリ
スクが高まっていく。現に、新年
早々に私たちは、自分の国を「再

び偉大にする」というナラティブ
を語る指導者が、法の支配を否定
し、剥き出しの暴力によって、意
のままに他国の主権を侵害する光
景を目の当たりにしています。こ
れまでの価値観が揺らぎつつある
この時代、私たちは「何を拠り所
として、どのような物語を生きる
べきなのか」を改めて問われてい
るのかもしれない。その問いに
向き合う場として、毎朝の礼拝で
神様に心を向け、聖書の言葉に耳
を傾げるこの時間は、ますます意
味を増してきているといえます。
聖書の物語は、人が勝手に作り上
げた「ナラティブ」ではなく、神
の御心によって創られる「真の物
語」だからです。

今日、ご一緒にお読みした、使
徒パウロの二回目の伝道旅行での
出来事は、そのことをとてもよく
示しています。パウロは、シラス
やテモテと共に、これまでに建て
られた教会を再び訪ね歩き、人々
の信仰を励ましながら旅を続けて

いました。この伝道旅行は順調
で、前回の礼拝で柿野先生が読ま
れた箇所最後の五節には、「教
会は信仰を強められ、日ごとに人
数が増えていった」とあります。

ところが、先ほどお読みしたよ
うに、彼らの計画は次々に頓挫し
ます。六節には「彼らはアジア州
で御言葉を語ることを聖霊から禁
じられた」とあります。何らかの
理由によって、アジアでの活動が
出来なくなってしまう、パウロた
ちは計画にはなかった、北の方の
フリギア・ガラテヤ地方へ行きま
した。そうして、今度はビティニ
ア州に入ろうとしますが、七節に
は「イエスの霊がそれを許さな
かった」と書かれています。その
結果、全く予定外のトロアスとい
う港町に辿り着きます。目の前
はもう道はなく、海が広がるばか
りで、パウロたちは途方に暮れた
ことと思われま。

私の場合はいよいよちゅうです
が、「計画が自分の思い通りに進
まずに挫折する」、そんな経験を

皆さんもしたことがあるのではな
いでしょうか。もし計画が挫折し
たら、その時、皆さんはどうする
でしょうか。落ち込むこともある
でしょうし、原因を求めて自分や
他人を責める場合もありがちで
す。ひよっとすると、陰謀論に引
き込まれる人もいるかも知れま
せん。

パウロの場合は、自分勝手な都
合で立てた計画ではなく、神様に
仕えるための計画だったにも関わ
らず、それでも思い通りにいかな
い理不尽な状況です。その時、パ
ウロはどうしたでしょうか。聖書
には書いてありませんが、きっと
パウロたちは、失望することな
く、ひたすら祈り続けたはずで
す。「この挫折には、きっと自分
には分からない意味がある」「そ
の意味は、全知全能の神様がご存
知だ」と信じたからです。その信
仰によって、神の御心を祈り求め
続けたからこそ、パウロは「幻」
を見たのです。

この「幻」とは、英語の「ビジョ

ン (vision) のことです。一般的に「ビジョン」という言葉は、「目指すべき理想像」として、人や組織が考え出すものです。しかし、聖書で、信仰を持つ者が見る「幻」とは、「神が示すビジョン」に他なりません。旧約聖書の箴言二九章一八節には「幻がなければ民は墮落する」とあります。人間が自分勝手に生きて墮落しないために、「神様が示す幻」が必要だということです。

その夜、パウロが見た「幻」は、一人のマケドニア人が現れて、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と願ったというものでした。彼はこの「幻」を信仰で受け止めました。そして、信仰をもつ仲間とこの「幻」を分かち合うなかで「マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神がわたしたちを召されているのだ」と「確信するに至った」のです。

ここで使われる「確信」という言葉は、元々「結び合わせる、組

合わせる」という意味があります。自分の計画が次々に挫折した現実と、それを遙かに超えた神のご計画が、ここでようやく「結び合わさった」、それ故の確信なのです。その時、パウロは初めて、自分の挫折が「聖霊が禁じていた」から、「主イエスの霊が許さなかった」から、つまり「神の御心だったのだ」と悟ったのです。そのように、肝心なことは後から知らされるのです。

この「確信」を得たパウロたちは、トロアスから船出してマケドニア州のフィリピに向かいます。この一行を乗せた小さな船が海を渡ったことで、キリストの福音が初めてアジアからヨーロッパへと伝えられました。キリスト教会の歴史において、極めて重要な一歩が踏み出されたのです。その後、キリスト教はヨーロッパ全土に広がり、巡り巡ってアジアの端にある島国へ、そしてこの六本木の地にも伝えられ、今日の礼拝へと受

け継がれていることは、何とも不思議なことです。

私たちは、自分の思い描いた「ストーリー」を、「何とか自分の力で生きなければ」と必死にもがきます。それが困難に阻まれ、計画が崩れると、苦悩や挫折を味わいます。でもそのなかで、やけを起こしたり、絶望したりするのはなく、例え理不尽に思えるような状況でも、なお、神の御心を祈り求め続けるならば、想像もしなかった「神様のビジョン」が示されるはずで、そうした「経験」と「祈り」と「神の御計画」が結び合わさる時、生きるに値する「真の物語」が紡ぎだされていくと思えます。キリストを信仰ぐ学校のナラティブが、そして、皆さんお一人お一人の人生のナラティブが、祈りの中で神の御心と結び合わされて、「真の物語」となっていくよう、心から祈ります。



数学科 五所 篤

ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖霊が降った。割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。異邦人が異言を話し、また神を賛美しているのを、聞いたからである。そこでペトロは、「わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができませんか」と言った。そして、イエス・キリストの名によって洗礼を受けるようにと、その人たちに命じた。それから、コルネリウスたちは、ペトロになお数日滞在するようにと願った。

(使徒言行録 一〇章四四〜四八節)

先ほど賛美した曲は、世界中で歌われ、たとえキリスト教にあまり縁がなくても良く知られている「アメイジング・グレイス」という曲です。讃美歌の歌詞は和訳されていますが、「アメイジング・グレイス」の原曲もおそらく皆さんのほとんどの人が知っていると思います。歌詞の内容としてはそ

の名の通り、アメイジング・グレイス、神の驚くばかりの恵みを歌っています。この曲を作詞した人を知っているでしょうか。この曲は十八世紀十九世紀のイギリスを生きたジョン・ニュートンという人物が作詞をしました。

彼の生涯を少し紹介しますと、

彼は貿易船の船長の息子としてロンドンに生まれました。母親は熱心なクリスチャンでしたが、ニュートンが七歳になる前に病死してしまいます。

ニュートンは十一歳で父と共に船に乗るようになり、さまざまな経緯を経て奴隷貿易に携わるようになりました。奴隷貿易とは、十六世紀から始まり、アフリカ大陸の黒人が労働力としてアメリカ大陸に売り飛ばされた貿易を指します。ここでは、奴隷となった人々へ、ひどい扱いがされてきました。その貿易にニュートンも深く関わっていたのです。しかし、二十二歳の時、ニュートンに転機が訪れます。アフリカ大陸からイギリスへ戻るとき、激しい嵐がニュートンの乗っていた船を襲いました。船が転覆してしまう危険がある中でニュートンは、昔母親を通して触れていた聖書の神を思い出し、必死に祈りました。すると、船は奇跡的に嵐を免れ、この

経験からニュートンは神へ目を向

けることとなりました。

その後、ニュートンは奴隷貿易をやめて神学を学び、三十八歳で英国教会の牧師になってから、生涯その働きにきました。「アメイジング・グレイス」は、牧師時代に作詞された曲です。私は幼い頃、教会でこのニュートンの話を聞いたことがあり「ニュートンは良い人に変えられて良かったな」という印象を抱いたことを覚えています。しかし、このニュートンへの印象が一新される機会がありました。

きっかけとなったのは祖母の葬儀で「アメイジング・グレイス」を賛美したときでした。四年ほど前に祖母は亡くなったのですが、自分の余命が幾ばくもないと悟ったときに、自分の葬儀で「アメイジング・グレイス」を歌ってほしいとリクエストしていたそうです。ちょうどコロナ渦でしたので、葬儀は親族のみで行われたのですが、楽器ができる孫たちで奏

樂をし、参列した親族で「アメイジング・グレイス」を歌いました。祖母の葬儀のあと、しばらく「アメイジング・グレイス」が頭から離れませんでした。良い曲だからなのか、葬儀で歌ったからなのか、なぜ祖母はこの曲が好きだったのだろうか、頭の中で曲が流れると同時に、色んなことを思いめぐらしていた時に、私は「アメイジング・グレイス」という映画があることを知りました。

映画「アメイジング・グレイス」は二〇一一年に日本で公開されたものでした。この映画の主人公は作詞者のジョン・ニュートンではなく、同じ時代にイギリスを舞台に、奴隷制廃止に命を懸けた政治家のウィリアム・ウィルバーフォースが主人公でした。映画は一八〇七年に奴隷貿易廃止法がイギリスの議会でも可決されるまでのウィルバーフォースの苦労が描かれています。この映画の中で、ウィルバーフォースが牧師となっ

たジョン・ニュートンのもとを訪れる場面があります。そこで、ウィルバーフォースは奴隷制の悲惨さを人々に訴えるため、かつて奴隷貿易に関わっていたニュートンに証言を依頼します。

そこでニュートンはこう述べます。「私が奴隷貿易に携わっていた時にアフリカ沿岸で見たり、聞いたり、感じたりしたことは深く私の記憶に刻まれているので、記憶があるあいだ私はほとんどそのことを忘れることはないし、大きく勘違いすることもないだろう」

そこには、神の許しを受け取りながらも、同時にかつての罪を背負い続け、それに悩むニュートンの姿がありました。

彼は二十二歳のときに命の危機に瀕した後、劇的に全てが変わり、牧師となって「アメイジング・グレイス」という曲を作詞した訳ではありませんでした。船の転覆事故の後、六年の間、奴隷貿易に関わり続けました。イエスと

出会い、心は確かに変えられたけれども、彼の取り巻く現実はずぐには変わらなかつたのです。

その後、奴隷貿易から離れることができてからも、もしかしたら彼は自分のことを責め続けていたのかもしれない。奴隷貿易という悲惨なことに関わってきた自身に情けなさや怒りを感じ、自己嫌悪に陥り、良心に咎めを感じ、けれども現実そこからすぐに離れることはできずに、それがより一層自己嫌悪につながる、そんな過去が長年彼を縛り苦しめたかもしれない。

私は衝撃を受けました。それまでの私は「神様に許されて、感謝です！」というある意味楽観的なイメージでニュートンのことを想像し、そういったハッピーな感情で「アメイジング・グレイス」という曲が作られていたと思つてたからです。しかし、映画を見たことでそのイメージは真逆なものとなりました。

そういった考えで「アメイジン

グ・グレイス」の歌詞をもう一度見たときに、この曲は現実に悩み、過去に苦しみ、それでも光を見出し、前に歩みだした人が作詞した曲なのだなと感じました。

今日の聖書の箇所を読むと、異邦人が洗礼を受けたことに驚いている人達がいます。異邦人とは、ユダヤ人にとっては外国人のことを意味しています。

当時、ユダヤ人と異邦人との間には、信仰や習慣等の違いにより、大きな隔たりがありました。だからこそ、ユダヤ人は外国人である異邦人は救われることはないと思つていたのです。幼い頃から律法を守り、努力してきたのに、つい最近神様のことを知ったような人たちが、救われるというのはなんだかとても悔しく受け入れることができないことだったのでしよう。彼らの心の中には、どのように自分の努力で築いてきたものや、ユダヤ人としてのプライドがあつたのです。

けれども、それは人間側の勝手な線引きであって、神様はユダヤ人であっても、異邦人であっても、過去にどんなことをした人であつたとしても、そこに隔たりは作られませんでした。

ユダヤ人ではなくても、どんな人種であっても、神のことを三度も知らないといったものであつても、神を信じるものを迫害していたものであつても、ニュートンのように自らの過去に苦しみ続けるものであつても、私たち人間の誰もが救われるに値しないと思つてしまふ人であっても、神様は一方的に恵みを、愛を、与えてくださるのといふのです。

私たちは、ニュートンほど人を傷つけた経験はないと思ひますが、時として仮に意図せずとも心無い言葉や行動をとり、他者を傷つけてしまうことがあります。そういう時は自分が一番、自分自身に情けなさや怒りを感じ、自己嫌悪に陥ります。それは、いわゆる

「良心に咎めを感じるから」なのでしょう。私たちが仮に、自分自身をどれだけ惨めだとか、弱いとか、もう誰も受け止めてくれないとか思つても、神様は変わらずに私たちのことを見てくださっているのです。私たちを見捨てずに、共に問題を背負ってくださるので、す。しかも、私たちの状況や状態に関わらず、無条件にです。それは私たち一人ひとりに向けられているもので、また、あなたの隣人にも向けられているものです。

そのことを覚えて、今日も敬神奉仕を実践する者として歩んでいきましょう。



国語科 高橋りり

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあつても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

(コリントの信徒への手紙Ⅱ 一二章九〜一〇節)

私は幼いころから教会に通い、イエス様が大好きになり、小学四年生のときに洗礼を受けました。そんな私は、中学生になつてからはうまくいかないことだらけで、神様からも離れ気味になつてしまいました。今日は、私が高校生の時にもう一度イエス様の愛を感じる事ができた話をお証します。

皆さんにはコンプレックスはありませんか。運動が苦手、勉強が苦

手、見た目に自信がない、自分のこういふところさえなければ……。もしかしたら、そんな気持ちを抱えている人も多いかもしれません。

私には、コンプレックスがたくさんあります。まず一つ、運動が苦手です。どれくらい運動ができないかという、あまりにも足が遅かった私は、体育の先生にふざけているのかと勘違いされ「おいしっかり走れ！」と怒られるほど

でした。

次に、見た目のコンプレックスです。自分の見た目に自信がなく、中学生の時は教室の中でいつも人の目を気にしていました。それと同時に、部活での友人関係でも悩むようになり、なにもうまくいかない自分のことがますます嫌いになっていきました。そして、足が遅い、自分に自信が持てない、そんなコンプレックスを抱いたまま、私は高校生になりました。

小学生の時に「神様ありがとう！」とあんなに素直に思えたのに、中学高校と過ごす間、神様が私を愛してくれている、という安心はいつのまにか消え失せていったのです。礼拝で聞くメッセージも、なんだか綺麗ごとのように聞こえるようになりました。

「もし、神様が私を愛しているなら、どうしてこんな私に生まれさせたんだろう。もっといい人から愛される、幸せな人生を送れる人間にしてほしかった。自分の

こんなコンプレックスなんて、全部なくなればいいのに。」

そう思うようになっていったのです。

そんな中、高校三年生になり大受験がやってきました。

私は心理カウンセラーになりたという夢がありました。コンプレックスだらけの私は、せめて大受験では成功したい、そう思っ

て必死で勉強しました。自分を追い込むために周囲の人に第一志望の大学を言いふらしていました。しかし、結果としては、心理学科のある第一志望の大学には落ちてしまったのです。

ここまできて、やっぱり私はダメなのかという絶望、周囲の人になんて言おうという焦り、運動も人付き合いもダメなのに、受験にも失敗するのか、という失望があふれてきました。この時には、神様から愛されているなんて、全く思えなくなりました。

しかし、受験期にも毎週欠かさず教会に行っていた私は、第一志望に落ちた後、教会の礼拝で『クリントの信徒への手紙二』の第二章に出会いました。

この箇所は、イエス様のことを多くの人に宣べ伝えた使徒パウロによって書かれた手紙です。あつい信仰を持っていたパウロにも、もしかしたらコンプレックスがあったのかもしれない。という

のも、七節にはこのように書いてあります。

「思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。」

ここは、ほかの聖書の訳では「私の肉体に一つのとげを与えられた」と訳されています。この「とげ」とは、なんらかの病気や障害だったと考えられているそうです。続く八節には、パウロがその「とげ」が自分からなくなるように三回願ったと書いてあります。いずれにせよ、パウロの身体には、彼を苦しめるどうにか取り除いてほしい欠点があったのです。

私は、これを読んだとき、神様が私を愛してくれているならコンプレックスなどなくしてほしかったと自分も願ったことを思い起しました。

しかし、神様はパウロにこう言われます。

「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。」

神様は、弱さをなくしてあげる、強くしてあげる、とは言われなかったのです。むしろ、恵みは十分だ、神様の力はその弱さの中で発揮されるのだと言います。

さらに九節でパウロはこう言います。「だから、キリストの力はわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」

パウロはその弱さを「誇る」とまで言っているのです。私は、ずっと自分のコンプレックス、つまり「弱さ」はなくなるべきで、人から愛されなければならぬと思っていました。とても弱さを誇

ることなんて考えられなかったのです。そのため、この言葉は衝撃でした。

では、弱さの中で主の力が発揮される、自分の弱さを誇るとは、どうということなのでしょうか。

考えてみてください。運動ができて、勉強もできて、おまけにかわいい、かっこいい、性格もいい、そんな人を愛することは、誰でも自然なことかもしれません。けど、イエス様の愛はどうでしょう。運動ができなくて、人と比べて落ち込んで、からかわれて、惨めで、受験にも行き詰って、誇れるものなんてなにもない。愛されることが難しい私を愛してくれるのがイエス様なのです。イエス様はその人が立派だから、優れているから愛するのではなく、その人がどれだけ弱くても、惨めでも、それでも愛するお方です。私が弱ければ弱いほど、その私を包むイエス様の愛の大きさがわかる。それが「弱さの中で主の力が発揮される」ということなのだと思います。

ます。

そのイエス様の愛のすごさが、弱い私を通してはっきりと見えてくるのなら、私は喜んで私の弱さを受け入れ、誇ることができません。

一〇節には、このようにあります。「それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」

ここでの強いというのは、失敗しないことや人より勝っていることではありません。私が弱いからこそ、そんな私を愛してくれるイエス様の愛のすばらしさに気が付くことができます。そして、イエス様に愛されていることを知っている皆さんは、しんどい時、そのしんどさを通してイエス様の愛がどのように示されるのか、期待することができそうです。そのイエス様に愛されていることこそ、「強い」ということだと思うのです。

パウロが言う「侮辱」や「迫害」、「行き詰まり」は、私たちにとっては、悪口を言われることかもしれない、仲間外れにされることもかもしれない、勉強してもうまくいかないことかもしれない、馬鹿にされることかもしれない、悲しくて仕方ない、自分が嫌いで、生きるのが苦しくなることかもしれない。

それでも、イエス様はあなたを愛しています。それを、私は高校三年生の受験期でこの箇所に出会い気が付くことができました。どんなにうまくいなくても、イエス様の愛を信じようと思うようになりました。

イエス様は弱いあなたを知っていただくさる。愛していただくさる。自分が弱い時にこそ、どれだけあなたのことをイエス様が愛してくださるかがわかる、それこそがまぎれもない私の、そして皆さんの強さです。

強いから愛されるわけではありません。完璧だから価値があるとい

うことでもありません。あなたがどれだけ自分のことが嫌いでも、それでもイエス様は愛してください。だから、あなたが弱い時、自分が嫌いになった時、どうかこの聖書箇所を思い出してください。あなたは弱い時にこそ強いのです。

クラス礼拝

中二―一

みなさんは楽しい毎日について考えたことはありませんか。日々生活していて今まででくるしかったことが一度もないという人は中々いないと思います。また、何不由なく暮らしてそうな人でも裏では悩みをかかえているものだと思います。私がそんな悩みをかかえたときの考え方としていつも大切にしていくことは、自分でその悩みを解決するために変えられることと、変えられないことを分け、変えられることに集中することです。例えば、私だとなにか試合に負けてしまったときに、負けたという結果を変えることはできないですが、これからの自分の練習の仕方は変えることができます。他には人間関係で悩んだとき

には、相手のことを変えることはできませんが、自分自身の受け取り方や行動、考えは変えることができます。なので変えられないことで悩むのではなく、変えられることを自分でやるということが大切だと私は感じています。それでものりこえられない事はたくさんあると思います。そんな時は未来になつたら今つらいことでも小さなことになると考えることと、コリントの信徒への手紙一 一〇章一三節にある通り、神様は耐えられない試練を人間にあたえることとはせず、逃れる道もおあたえになつていくと信じてのりこえていきます。日々の生活でくるしいことと悩みはたえないと思いますが、変えられることと変えられないことを考えてこれからも生活していきたいと思いました。

中二―一

皆さんが今一番好きなことは何ですか。スポーツや音楽、絵を描くことなどそれぞれあると思います。私が好きなことは部活です。私はハンドベル部に入っているのですが、みんなと一緒に音を合わせ、曲を作る時間がとても楽しいです。

ハンドベル部の練習では、一人一人が違う音を担当しています。私がまだ慣れていなかった頃、よく音のタイミングを間違えていたのですが、そのたびに同輩や先輩方にアドバイスをもらいだんだんと上達しました。練習を続ける中で、私はあることに気づきました。それは「うまく演奏するには、自分の音だけでなく、他の人の音をよく聴くことが大切だ」ということです。誰かが困っていたら助け合い間違えても責めずに支え合う、そんな姿勢があると音楽も人の関係も良くなります。

私達の毎日と同じだと思いません。学校でも家庭でも、よく自分のことばかり考えてしまうことがあります。でも、もう少しだけ周りの人のことを考えてみたらどうでしょうか。誰かに優しい言葉をかけたり、助けが必要な人に手を差し伸べたりすることで、私達の周りにやさしい空気が広がってきます。その小さな一歩こそが、神様の愛をこの世界に伝える大切な方法なのです。

イエス様は、弟子たちにこう語られました。
「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」
イエス様は、言葉だけでなく行動で愛を示されました。私達も、日々の生活の中で助け、支え合い小さな愛を形にしていけることができますように。

中二二一

私の通う教会には、同じ東洋英和の友達がいいます。先週は一緒に秋のリースを作りました。一ヶ月ほど前には、教会の遊び会で、小四の子とオセロをしました。結果は私の惨敗。十個ほど差をつけられて負けてしまいました。

このような感じで、私はかなりの頻度で教会に行っています。しかし、ほんの数年前まではキリスト教に関わりがなかった私が、ほぼ毎週教会に行くようになったのか、それはちょっと謎でもありません。なぜなら、私はめんどくさがりだからです。そんな私が、毎週通えるようなところはそうそうありません。それなのに、私は通っています。

私はそれには何かしらの理由があるのではないかと考えるようになりしました。今は、神様という存在の介入だと思っています。今の私にとって神様は、人を導く存在

です。私が何かの悩みに直面したときに、最終的に最良の判断を下して、導いてくれるのは、神様なので、何が最良なのか、私が悩む必要はないと思うことができま。だから、教会に行くか否か、ということについても、神様がその時その時に合わせた一番良い選択をしてくれている結果、私は頻繁に教会に行くということになっているのではないかと思います。

これからの人生もたくさんの決断が必要になっていくのではないかとありますが、そんな時でも、神様にその時の最良の判断を神様に委ねつつ、楽しく過ごしていけたらいいなと思います。

中二二二

イエス様はマタイによる福音書二五章四〇節でもおっしゃられているように、貧困や飢餓にあえぐ弱い立場の人を助ける具体的な行動を大切にされています。現

在、世界では七秒に一人、年間で四百九十万の子供が五歳になる前に命を落としています。その原因の多くに関わっている理由の一つが栄養失調です。栄養失調は食料や栄養が不足することで起き、特に五歳未満の子供が栄養失調に陥りやすいと言われています。重症の栄養失調は命の危険性があり、急いで治療をしなければなりません。治療が必要な子どもを探すときに使うのが「命のうでわ」です。これが命のうでわです。このうでわを使って二の腕の太さを測ります。このうでわで十一・五センチとはこれぐらいの太さです。私は初めて見たときとても細くてびっくりしました。国境なき医師団という民間で非営利の医療、人道援助団体が作ったそうです。最近ニュースでよく聞くイスラエルとハマスの戦争の影響でガザ地区で飢餓が深刻になっており、実際にこのうでわを使って、優先的に治療が必要な子供を探し出すのに使われているそうです。

紛争や戦争が継続的に起こっている地域では、安定した生活が送れないため飢餓が悪化する傾向にあります。皆さんは飢餓というと発展途上国でおこることで、私達はまだ関係のないことだと思いませんか。しかし、日本でも飢餓で苦しんでいる人がいます。相対的貧困率が日本は十五・七%で七人に一人が貧困です。日本にも貧困問題というものがあるので。一方で、皆さんフードロスという言葉が最近よく聞かれています。日本では国民一人につき毎日、お茶碗一杯分の食品が捨てられているそうです。日本でも日々の食事に困っている人たちがいるなかで、私達は少しでもフードロスを減らす努力をしないとイケないなと思いました。私達もいろいろな工夫ができると思います。毎日当たり前のように食事をとり、学校に通えているという神様からの恵みに感謝して、困っている人のことを思っって礼拝をささげ日々を生きていけるといいなと思います。

●ディアコニア活動記録

△視覚障がいについての講演▽

中一—四

○講演の感想

今回は視覚障がいの並木さんのお話をうかがいました。

並木さんが若い頃に発症した病気は未だに治療法が見つかっていないということに驚きました。

これまで私は障がいを他人事だと心の中では思っていました。が、治療法が見つかっていないということは誰かがいつなつて、目が見えなくなつてもおかしくないということなので、自分事としてしっかり捉えることが大切だと思いました。また、今の私は目が見えなくなるなんてことになったら生活していけない!と考えるしまうけれど、目が見えないなど障がいを持っていて色々なことに挑戦することで楽しく生きることができるといふことに気付きました。

今日の並木さんの講演によって障がいを持つている方々をより身近に感じることができ、今度見かけたら声をかけて手伝ってみようと思いました。

中一—五

○並木先生はどのようなお話をされましたか? 初めて知ったこと、心に残ったこと、関心を持ったことなどを中心に書きましよう。



講演の後に質疑応答の時間がありますが、私たちが目の不自由な方のためにできることがあれば教えてくださいという質問に対して先生は次の三つのことを教えてくださいました。

①声かけサポート…白杖は見えない人が外出するときに使う杖です。杖を持っている人が白杖を持ち上げていることは「助けてください」というSOSサインなので、その時は優しく声をかけてください。

②点字ブロックに立ったり、物を置いたりしない…電車に乗る時、ホームの点字ブロックは命に係わる大切なものです。ドアの位置がわかるだけではなく、線路に落ちないように注意できるものです。町の中でも同様です。自転車などが点字ブロックに置いてあるとぶつかってしまうことがあります。

③歩きスマホをしない…見えな人は向こうスマホに夢中になっている様子がわからないので避けることができず、ぶつかってしまいます。

○講演の感想

「障がい者もみんな同じ人間」「人間はがんばればなんでもできる!」という言葉が心に残りまし

た。また、障がい者とひとくくりするのではなく、それぞれの個性を尊重することがたいせつだなと強く感じました。

この前、町中で白杖を上げている人がいたけれど、何のサインか分からず通りすぎてしまったことがあります。今回それはSOS、つまり助けてほしいというサインだと知りました。もしSOSサインをしている人がいたら、優しい声かけや手伝いなど、自分にできるささいなことでもいいからしたいと思いました。

また並木先生は二十三才の時に盲目になったとおっしゃっていたため、十三才の私もいつ目が見えなくなるか、障がい者になるか分からないと実感させられました。盲目になってしまったら、私は大好きな絵を描くことも見ることもできなくなってしまう。でも、並木先生のように限られた行動の中でも色々なことに挑戦している人たちもいます。そんな方々が安心して過ごせるように、優しい思い

やりと持った行動をしていきたい
と思います。

△視覚障がいについての講演▽

中一―二

○ブラインドサッカーを体験して
みて感じたことを書きましよう。

目の見えなさは大体想像してい
たくらいだったので、「本当
にこれであっているのか？」とい
う不安はとて大きかったです。

サッカー体験をした時、音の出
るボールが来ても本当にどこにあ
るかかわらず、たまたまボールを
けてくれた子がけるのが上手
く、まっすぐきて、足もとに来た
のでとれましたが、そうじゃな
かったら絶対とれなかったと思
います。だからこそ落合先生のよう
なプロの選手たちは本当にすこ
いなどと思いました。

○パラスポーツを広めるために私
たちができることは何かを考え

ましよう。

身近なひとでもいいので、今日
のことを話し、なるべくたくさん
の人に知ってもらおう!!

中一―三

○ブラインドサッカーを体験して
みて感じたことを書きましよう。

目が見えない状態ではまっすぐ
歩くことも難しく、点字ブロック
の大切さがすぐ分かりました。
また、その時、声がききとりづら
かったのが目が見えない人に何か
指示していたら静かにしようと思
いました。

他の人にボールをけてもらっ
てそれを止める体験では、見てる
時はすぐ簡単そうで、「これな
らできそうだな」と思っていたの
に全然ボールがどこにあるか分
らなくておどろきました。目が見
えない状態でボールをける体験で
は、目の前にけったつもりだった
のに右斜めにいってしまって、あ

らためて目が見えない状態で決
まったところにけれる選手はすこ
いなと思いました。目が見えない
人に指示する体験では「足といっ
てもどこの部分をさしているの
か」などくわしく説明しなくては
いけなくて大変でした。

○パラスポーツを広めるために私
たちができることは何かを考え
ましよう。

・友達や家族に話す。
今日体験したブラインドサッ
カーや点字体験のことを友達や
家族に話すとその話を聞いた友
達や家族が他の人に話してそれ
がどんどん広まっていくかもし
れないからです。

・実際に体験してみる
アイマスクをして一時間過ごす
かヘッドホンをしてしゃべって
みるなど家にあるもので簡単に
できるので友達や家族と体験し
てみるといいと思います。

編集後記

今号もお読みいただきありがと
うございます。

またご執筆くださった方々にも
感謝申し上げます。

「ナルドの壺」とは、イエス様
に高価な香油を惜しみなく注いだ
女性の信仰に由来しています。

礼拝は、多忙な日々の中で神様
への愛と感謝を注ぎ出す、最も大
切な時間ではないでしょうか。

勉強、部活、友人関係と、それ
ぞれの賜物を注いでいる中高生
の皆さんが、この礼拝通信を通
じて、「ナルドの壺」のような瞬
間を再確認してくだされれば幸い
です。

皆さんの上に神様の豊かな恵み
がありますように。

(朴 洙美)